

児童英語教育を通じて考える、地域貢献 ―「しばたサマーフェスティバル2023」活動報告

大岩 彩子

はじめに

本報告では、児童英語教育ディプロマプログラムのインターンシップ活動として9名の学生が「しばたサマーフェスティバル 2023」に参加した活動内容を報告する。プログラムの「土台」である「グローバル・シティズンシップ教育」と「地域貢献」の意識付けの効果を中心に参加学生の学び、気づきを考察し、今後のプログラムの課題を考える。

1 プログラムについて

筆者が担当する児童英語教育ディプロマプログラムは、2年次に児童英語教育概論と実践を履修したのち、3年次の学生がさらに15コマの授業（児童英語教育指導実習論）と1350分以上のインターンシップを行うものである。インターンシップ先も多様で、聖籠町立小学校での授業参観、筆者及び実践を担当される坂井先生の小学校での授業のアシスタント、ウクライナの子どもを対象としたオンライン授業の見学などがあるが、最も力を入れて行うインターンシップは聖籠町民会館で行われる週末体験くらぶの授業担当である。90分の授業をインターンシップ生が1から組み立て準備し、児童15名程の授業を行う。毎年「エリック・カールの作品」「多様性」「平和」などのテーマを設け、3回シリーズ（7月、10月、12月）で行っていた。今年度は後期の2回のみ予定となっていたが、サマーフェスティバル参加のお誘いを受け、サマーフェスティバル1回と週末体験くらぶ2回を統一のテーマで計画立てることとした。

2020年より筆者が児童英語教育プログラムの担当になった際にプログラム全体の土台を定めた。一つ目は「モンテッソーリ教育」の観念である「平和な子どもが平和な社会を作る」という考えである。児童の学習環境が秩序的であること（ユニバーサルデザインを意識すること）、また他感覚の学び方を取り入れることで全ての児童が「できた!」という体験をし、その成功体験の積み重ねが学習者の自立（自分でできること）と自律（自分ではできると知っていること）に繋がると考える。自立と自律は自己肯定に繋がり、さらに子どもの心の平和に繋がる。そのように、平和な子どもが平和な社会を作るという考えである。二つ目は「批判的教育論」の考え方である、教育を通して私たちが目指したい社会を学習者に体験させ、それを体験した学習者が教室の外に出た時に社会を変えていくかもしれないという「希望」を持つことを指す。教育はエンパワメントであり、より良い社会

を作るための草の根活動であるという考えである。三つ目は「グローバル・シティズンシップ教育」の概念である。児童英語教育では、筆者がカレッジレポート第 89 号（大岩、2017）で記した国際性を養う英語教育の中でも特に 1) Accepting the Diversity、2) Peace and Justice、3) Respect for the Nature にフォーカスを当てる。英語を学ぶということは異なる文化、意識、宗教などに触れるということで、子どもたちが異なることを受け入れ楽しめる態度を育てることを大切にしている。小学校や地域から依頼される授業はハロウィンやクリスマスなど季節のテーマを扱うものを依頼されやすいが、そのパターンをあえて崩し、平和、公正性、環境や動物保護など国際社会で生きる市民として必要な意識を養えるテーマを選択する。土台として定めた最後の概念は本学のミッションステートメントである。隣人に仕えるとはどういうことか、我々が児童英語教育を通してどのように社会に地域に貢献できるかを学生と共に問い続けることが大切だと考える。

2 準備と当日の様子

ディプロマプログラムはゼミ単位の参加とは違い、毎週授業時間を使って準備をするということができない。任意で集まりテーマ決定、連絡、準備を重ねた。また、インターンシップとしての活動ということで、利益を出す形での出店ではなく教育的・参加型・無料参加の催しを計画することが話し合いで決定した。今年度のテーマを「環境問題」と設定し、サマフェスで扱うテーマは「海洋ゴミ問題」とした。

通常の授業計画を立てる際は、まずテーマに合う絵本を選ぶ。その絵本から単語、文法を抜き出しフォーカスして教えられる要素をマインドマップでまとめる。それらに合わせて歌、ゲームなどの活動を考え、1回の授業で8つの多重知能が満遍なく発揮されるよう授業を組み立てるという流れである。しかし今回はお祭りであり、45分ないし90分の授業に参加するということではないので、英語の絵本やクイズなどいくつかのコンテンツを体験してもらい、遊びながら英語に興味を持ち、さらに海洋ゴミについて理解を深められる活動を考えることになった。坂井先生考案の「Max at the Aquarium」という、ねこの Max が様々な海の生き物に出会う英語紙芝居を活用することにした。紙芝居を楽しんだ後は海の生き物の名前を英語で考えるクイズを用意した。例えば「Sun（太陽）+ fish（魚）はどんな生き物でしょう？（答えは Sunfish でマンボウ）」、「sea（海）+ cucumber（キュウリ）はどんな生き物でしょう？（答えは sea cucumber でなまこ）」という具合である。次は釣りゲームに参加してもらい、紙芝居やクイズに出てきた生き物と海洋ゴミが一緒に入っているプールからゴミを釣り上げてもらう仕組みにした。釣りゲームの後には「きれいな水と魚」が印刷されている紙を受け取り、「汚い海」が描かれたパネルに参加者が「きれいな海」を貼り付けていく活動を考えた。参加者全員で協力し、

汚い海をきれいにできるというコンセプトを可視化する活動であった。また、参加する子どもは最初に「Ocean Rescue Hero Passport」というカードを受け取っており、活動に参加するとスタンプを押してもらえ、スタンプがたまると海洋ゴミについて学んだという証になるものであった。

今年度のディプロマプログラムの参加者にとって初めてのイベントであり、加えて初めて参加するお祭りでの催しということで参加人数、反応など想像で進めなくてはならない部分が多く、準備には6週間程の時間を要した。サマーフェスティバル当日は準備から片付けまで滞りなく行えた。会場の音、照明などが想定と違い、紙芝居を読む際の声量が足りなかったり後半暗くなってしまう釣りゲームの手元が見えづらかったが、試行錯誤し自分たちの力で改善の方法が見つけられたので大きな問題ではないと考える。参加者はのべ80名程で多くの子どもたちに楽しい英語学習の機会を届けられた。

3 学生のリフレクションと考察

9名のインターンシップ生が提出したリフレクションから、得た学びや反省点などを抜粋し共通項目にまとめたものを記載する。全体を通して、やりがいを感じた、活動がうまく行った、チームとして成長できた、想定外の事も臨機応変に対応することができた、という振り返りが多かった。

肯定的なリフレクション

やりがい	参加してくれた子どもたちの喜ぶ姿や積極的に参加する様子に、時間をかけて準備したやりがいを感じた。嬉しさを感じた事が子どもと関わる仕事に就きたいという思いに繋がった。
活動	準備等含め大変時間がかかりましたが、良い活動ができたと実感している。Mission Ocean Rescue というテーマに当てはめて多くの子どもに楽しく参加してもらえたと思います。
	話を聞いているだけの活動より、子どもも一緒に参加できる活動のほうが子どもに私たちが伝えたい内容をインプットしやすいと改めて感じた。
チームワーク	この経験を通して自分も、チームとしても少し成長できたように思う。

チームワーク	<p>イベントが終わってみて、児童英語のメンバーで参加したことはとても良い経験だったと思います。準備や当日の活動など多くの時間を使い毎週準備をしてとても大変でした。ですが当日みんなで祭りに参加して児童と関わったり敬和の他の学生と交流したりととても充実した1日でした。</p> <p>児童英語のディプロマメンバーと協力して何かを作り上げるという経験自体が初めてのことであったため、リーダーとして少し苦戦しましたがみんなで協力して準備も本番も進められてとても良かったと思う。自分だけで好きにやるのではなくみんなで協力して活動すること、連携をとることの重要性を学べた。</p>
学び	<p>紙芝居→海の生き物クイズ→魚釣りゲーム→パネル作成という4つの活動を順番に行うことを想定していたが、魚釣りゲームだけをさせてほしい参加者がいた。戸惑ったが臨機応変に対応することができた。</p>
	<p>子どもたちの様子を見ていて、このような活動の場で楽しみながら学ぶことで記憶に残り新たな学びを得ることのできるよい機会になると感じました。さらに、子どもたちとの関わりを通して一人ひとりの様子をしっかりと汲みとりながら活動することが重要であると改めて感じました。その時の状況に合わせて適切な声掛けなど対応ができるよう意識していきたいです。</p>
	<p>子どもたちの様子を見ていて、このような活動の場で楽しみながら学ぶことで記憶に残り新たな学びを得ることのできるよい機会になると感じました。さらに、子どもたちとの関わりを通して一人ひとりの様子をしっかりと汲みとりながら活動することが重要であると改めて感じました。その時の状況に合わせて適切な声掛けなど対応ができるよう意識していきたいです。</p>

反省点に関しては紙芝居や指示の練習の足りなさ、チラシを配布し呼び込みをするスタイルで行う集客の難しさ、内容の適切さやメッセージを届ける難しさ、想定しなかった照明や騒音、分担についてが述べられていた。

反省点としてのリフレクション

準備	<p>普段は小学校などで授業をする経験しかなく、人数や年齢が定まっていなイベントを行うのは初めてだったため、準備に非常に時間がかかってしまった。特に、魚釣りゲームで使う魚の数や、魚を張るパネルの大きさがなかなか決められなかったため、試作を何度も作り大きさを調節するやり方をするべきだったと感じた。また、作業をするうえでスケジュールを立て、一つの作業をいつまでに仕上げるのかを明確に決めておけばもっと時間に余裕ができリハーサルが出来たのではないかと感じた。</p> <p>もっともっと練習してから臨むべきだった。大きな反省点だ。しかし、真剣に聞いてくれる子、積極的に答えてくれる子、一緒に動きをしてくれる子がたくさんいて嬉しかった。</p>
集客	<p>呼び込みの方法がチラシと声掛けのみだったことです。大きな看板や読むだけでどんなことをしているかが分かるような説明書きを店頭に置いておくべきだったと考えます。チラシを渡して呼び込みしても、店が見えないくらい遠くで渡しても場所が分からなかったり、店の近くで渡しても始まる時間までお待たせすることになるので、やはり目印は大事だったと思います。</p> <p>当日は、初めに予想していたより人が入らず、チラシをもって呼びかけをしても興味を持ってもらえず予定していた開始時間から始めることができなかった。17時ごろはお祭りに着ている人自体が少なかったということもあったが、呼びかけの際にあまり積極的に声をかけられなかったことも集客ができなかった原因であると感じた。</p> <p>チラシを持って行う呼びかけの集客が思った以上に難しかった。初めてだったこともあるが、断られてしまった時のダメージが大きく、また私たちのブースが一番端だったこともあり、なかなか難しかった。</p>
活動内容	<p>反省点は、紙芝居を読むときに少し早口になってしまったり、子どもたちの表情や反応を汲みとることができなかった場面がありました。遠くまで聞こえる声のトーンでゆっくりはしっかりと読むことと、視線を手元ではなく前に向けることを意識して練習を積み重ねていきたいと思います。</p>

活動内容	<p>英語を教える余裕がなく、単なる魚釣りゲームになってしまった。しかし、一緒に参加した4年生に説明のやり方を変更するアドバイスをいただき、急遽スクリプトを変更したところ、子どもたちをスムーズにゲームに参加させることができた。</p>
	<p>私たちが本当に伝えなかった、「海の環境を守ろう」という意図が子どもたちにも、一緒に来てくださった保護者の方にもあまり伝わらなかったと思う。参加者の中にはただ楽しんで終わり、になってしまった方もいたように思う。また、子どもたちが「飽きることなく楽しくできること」を第一に考えるとするなら、紙芝居→クイズ→釣りゲームの一連の流れを全て体験してもらって完結するというのは長すぎたように思う。もしも、また今後やるとしたら、釣りゲームだけ体験する、紙芝居だけ聞いていく、というどれか一つに参加してもらって終わりにできる活動にするべきだと感じた。(そのせいもあってか、子どもは行きたい！と思ってくれても、あまり前向きに捉えてくれない親御さんもいた。)</p>
	<p>反省は、サマーフェスティバルに活動の内容が適していなかったのではないかという点です。気軽に参加はできますが、その後の拘束時間が長くお祭りの屋台を楽しむ時間を奪ってしまった可能性があると考えます。改善点としては、紙芝居、クイズ、釣り堀をひとつずつ分けても成り立つようなプランにすることです。今回は紙芝居、クイズ、釣り堀が合わせてひとつの活動だったため、拘束時間が長くなってしまいました。全体のバランスとしても、コンセプトとしても準備の段階では申し分ないと感じていましたが、実際にやってみると難しさを感じるが多かったです。準備の段階から実践する時のことをより詳しく詰めて行くことが大切だと考えます。</p>
	<p>もうすこし時間と場所を有効活用できる方法を考えればよかったと思いました。途中からは改善して、釣りだけやりたい児童には終わって時間あれば紙芝居も見て行ってね～と声掛けをして先に釣りをやってもらうようにしました。</p> <p>また、始まる時間が固定されていたので、それまで親御さんも含めて座って休めるスペースが作れたらもっと良かったと思います。</p>

環境	<p>周囲の声が思っていたよりも騒がしく、紙芝居を読んでいる声がとても聞き取りにくかった。大岩先生のアドバイスで、紙芝居を読む人と紙芝居をもってめくる人とをペアにすることで、正面を向いて読めるようになり多少は改善された。椅子の後ろから見ていると、なにを言っているのか分からない場面が多々あった。声が聞こえないと活動をしている意味がなくなってしまうので、拡声器などの使用も検討する必要があると思う。</p> <p>夜まで活動が続くのにも関わらず、明かりの用意をしておらず、最後の回では釣り堀の活動やパネルに魚をはるときに手元が暗くなってしまった。</p> <p>→スマートフォンのライトでなるべく明るくなるように調整したが、明かりの向きを考えて釣り堀とパネルを設置するべきだった。大きなパネルで完全に明かりを遮ってしまっていた。</p>
分担・チームワーク	<p>準備段階から、リーダーへの負担が大きかったと感じた。リーダーに頼るのではなく、自分から率先して動き、リーダーを支えることが出来ていたら負担が偏らなかったと思う。また準備の段階で他のチームの進捗状況が分からず、自分の担当のことだけを考えてしまっていた。そのため自分の担当のタスクが終わった時に、他のチームを手助けできなかった。活動準備の進捗状況を全体で確認することで、自分の担当以外の準備も手伝うことができたと思う。何らかの形で全員が全てのチームに関わることで、同じ目標に向かって全員で突き進もうという気持ちが生まれたり、活動により一体感が出たと思う。さらに、自分が担当する以外の活動でどんなことを行うのかを具体的に分かっておらず、本番で助け合うことが難しかった。私は魚釣りゲームの担当だったので、事前にどんな感じで進めるのか、スクリプト等を全体に共有、確認しておく良かったと思う。事前に全体で確認することで、他のチームの人からも意見をもらうことができ、より良い活動になると思う。</p>

今年度のディプロマチームの最大のアセットは、人数である。筆者がプログラムに携わるようになってからの5年間は4名から6名で年間活動する年が多く、少ない年は3名であった。2023年度は9名の3年生が児童英語教育ディプロマ取得を目指した。その9名の最初の活動が、今まで経験したことのないサマーフェスティバル参加でのインターンシップ活動ということで、チームとして団結し一つの目標に向かって活動する良い機会に

なったと考える。高校3年生から大学2年生までをコロナ禍で過ごし、皆で力を合わせ一つのことをやり遂げる達成感に繋がるような大きなイベントが極端に少ない年代の学生達であるが、互いの強みを生かした仕事の分担や助け合いが良くできていたと思う。

反省点として記された点は、この後10月と12月に行った聖籠町での「英語で遊ぼう！」で活かされ、リハーサルを念入りに行うこと、特に読むスピードや声量の練習に力を入れていた。サマーフェスティバルの経験から臨機応変な対応が必要だと気づいたことも、大きな意味があった。授業中に臨機応変な対応ができるという事は120%の準備ができていて心に余裕がなければいけないという学びに繋がった。お祭りという場で教育的なアプローチが難しかったことも反省として述べられていたが、その後の授業では「環境について私たちができる事」をテーマに、水の循環やエコクラフトなど伝えたいメッセージを洗練することができた。集客などお祭り会場特有の難しさは、今までに経験したことのない事にチャレンジしてみる良い機会であった。教員としては学生が安心してチャレンジしたり失敗できる雰囲気を作る事が大切だと考える。総じてこの経験から得たものは学生達の「私たちはサマフェスができたならなんでもできる」という自信であり、7月以降の活動に置いて、チャレンジしてみる態度や難しさを乗り越える力となった。

おわりに

児童英語教育ディプロマプログラムのインターンシップとして学生が参加したサマーフェスティバルは、参加後の意識に大きく影響したと言える。チームとして団結し、自分たちの課題が見え、そして難しい状況も乗り越えられるという自信に繋がった。英語学習がこどもにとって成功体験の積み重ねであるべき理由と同じく、教え方を学んでいる学生にとっても成功体験の積み重ねでなければいけないと改めて感じた。

ディプロマを目指す学生達は地域の小学生（佐々木小学校、聖籠町週末体験くらぶ参加者など）と触れ合う機会が多く、地域の小学生にとって「身近にいる英語を話す人」というロールモデルになっているという意識は根付いている。しかし、自分たちの知識やスキルが地域貢献に繋がっているという意識はまだ薄いように思う。指導教員としては、学生達が学んで得た知識・スキルはさることながら、参加してくれる子どもたちに教えたい教育的かつグローバル市民として必要不可欠な知識となるコンテンツを無料で提供したこと、その準備にかけた時間と労力も含めて「貢献」だと考える。インターンシップの単位になるという見返りはあるにせよ、学生9名がもっているもの（加えてご家族からも協力を得た物品）を惜しみなく持ち寄り提供したという意識は薄く、リフレクションでそのような記述も見られなかった。さらに、子どもが英語学習を通して「できた！」と感じる成功体験の積み重ねの一端を担う活動ができているという事も、地域の子どもの自己

肯定感の育みに繋がっていると言える。自立と自律に向かって成長する子ども達が本来あるべき平和な子どもの姿であり、そのような平和な子どもたちが平和な社会をつくる。地域で活動する児童英語教育プログラムはその過程の一部になれるという希望を持ち、ディプロマ生はそれをより強く意識することが必要だと考える。ディプロマ生にとっても「活動がうまく行った」という成功体験にとどまらず、「地域のため、平和な社会のために貢献できた」という成功体験の意識付けが、今後のプログラムの課題だと考える。そして、サマーフェスティバルへの参加を含め私たちはどのように地域に貢献できるのかを、学生達と問い続けたい。

引用

大岩彩子 (2017). 「国際性を重視した豊かな英語教育の実現に向けて」. 敬和カレッジレポート 第 89 号 2017 年 12 月号 (p.1-3)

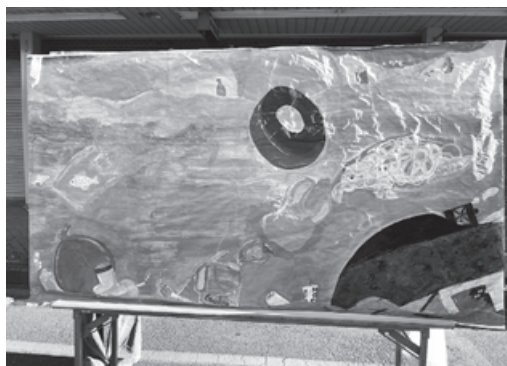
英語紙芝居 “Max at the Aquarium” 上演



釣りゲームの様子。海洋ゴミを釣り上げる



汚れた海を描いたパネル



参加者と一緒にきれいな海のパネルが完成

